

展 望

青年期の人格形成の理論的問題

——アメリカ青年心理学の一動向——

村 瀬 孝 雄*

問 題

わが国の青年心理学は戦前、Stanley Hall を除けば、Spranger, E. と Bühler, C. の両ドイツ人学者の理論から強い影響を受けたが、戦後は Ausubel (1958) の理論からかなり影響を受けたとはいえ、その他には漠然と種々のアメリカ青年心理学書が断片的に紹介されるにとどまっているように思える。漸く最近になって Erikson, E. の理論が紹介され始めたが、後に述べるようにこの理論の真髓がどこまで日本で理解されているかにはやや疑問が残る。

ところで、このように戦後専らアメリカ心理学に追随してきた日本の青年心理学の内部において久しい以前からその「不毛性」が問題にされてきた（たとえば西平 1964）。ところがわれわれが手本としてきたアメリカ青年心理学の方は必ずしも不毛とはいえない状況である。こう見てくると上記の不毛性は手本の受け入れ方、学び方に問題があるのか、もしくはもはやアメリカ青年心理学は手本としてわれわれの役に立たないが、そうかといって自分で今までの日本の青年心理学を發展させていく力には欠けているのかのどちらかである。

西平 (1964) は日本の青年心理学は従来からのオーソドックスな発達心理学的方法に加えて、社会心理学的方法と臨床心理学的方法を強力に導入し、これらの異なった諸立場を総合した青年心理学をつくるべきだと結論している。筆者も同じ考えであり、西平よりも一層、臨床心理学的接近の重要性を強調したい。それは臨床心理学的接近こそ、青年期の変動著しい諸経験に伴う人格変容の過程や病理的現象あるいは複雑微妙な適応の過程などにせまるのに有効な理論と技術的熟練の両者に裏づけられた組織的接近法に他ならないと考えるからである。戦後のアメリカ青年心理学は Blos, P. と Erikson, E.

の両人の理論に負うところ極めて大であるが、彼らとともに精神分析の立場に立つ臨床家であり、かつ理論家であるのは決して偶然とはいえない。文化的風土の違いがあるにせよ、わが国の心理学が青年心理学も含めて、精神分析はもちろん、一般に臨床的接近になじんでいないことが、今日のアメリカ青年心理学のある重要なすう勢に十分ついていくことができない1つの理由ではなからうか。病的現象の理解が正常な心理の理解に極めて有用であることは欧米の心理学の世界では常識であるが、わが国ではこうした態度が育っていないのは残念なことである。

近年、精神医学の世界では、青年期に好発する特異な精神病理現象への関心が高まっているが、正常な青年期と病的な青年期とはどのような点で区別されるか、正常な青年期の特徴は何か、といった問いにこれまでの青年心理学は殆ど答えられなかったといつてよい。

社会心理学的な考え方と技術はわが国の青年心理学にも比較的容易に受け入れられ、活用されてきたが、しかし、この場合もわが国の社会心理学そのものの力不足のため十分な成果をあげるに至っていない。総理府では殆ど毎年青年の意識調査の結果を公表しているが、青年心理学の發展に資する程のものとは言い難い。

3番目に筆者が問題にしたいのは、わが国では発達という人間の長期にわたる変化過程そのものを研究する分野において、同一の人間を長期にわたって縦断的に追跡調査した研究が殆どないという点である。とくに青年の人格を解明するためにはひとりひとりの青年の個別の変化をつかむ必要があるが、こうした研究は皆無に近いばかりでなく、アメリカでの研究の成果も殆ど知られていない。このことは、わが国の青年心理学者が人格の発達を一般的抽象論として考える習慣はあっても、生きたひとりひとりの青年の人格がどのような条件に規定されてどう変化するものであるかについての切実な興味に乏しいことを示している。

* 国立精神衛生研究所

以上わが国青年心理学の弱点と考えられる3つの点として、広義の臨床心理学的関心の欠如、社会心理学的な接近の不十分さ、発達経過を追っての縦断的研究の不足をあげた。

以下においては、これらの観点がアメリカ青年心理学ではどのように現実化しているかを、研究の狙い、方法、成果、意義の諸点を中心に若干の展望を試みる。

精神分析的方法

青年心理学に大きな影響を及ぼした精神分析学者としては、Anna Freud, Peter Blos, および E. H. Erikson の3人がとくに有名である。このうち最後の Erikson は前二者よりもはるかに広い視野に立って、歴史的社会的存在としての人間の考察を行なっているので項を改めてとりあげることとし、まずもっとも正統的で臨床精神分析そのものの範囲内で研究を行なってきたはじめの2人のうち、最初にあげた A. Freud の考えをうけついで大きく発展させた P. Blos の仕事に重点をおくことにする。

a. P. Blos の「第二次個性化の理論」 この学者の見解はその主著(1962)を通じて、わが国でも一部の青年心理学者や精神分析研究者にはよく知られているが、精神分析アレルギーのためや邦訳*の題が原書と全く異なり「精神医学」と銘打っていることも手伝ってか、その学説は殆どわが国の青年心理学一般には影響を及ぼしていない。彼には、この書物の他に研究の初期にかかれたものと、ごく最近の事例研究書との2冊の書物、および20近い論文があり、いずれも青年の心理について理論的解明を目指したものである。Blos が行なった貢献をごくかいつまんでいうならば、青年の心的再構造化過程を、衝動と自我の修正として示される第二次個性化、退行の変遷、および、青年期の発達課題への自我の対処の仕方の3つの観点から分析し、これらの諸相のあらわれ方、相互作用の仕方が特徴的に示されるいくつかの異なった時期を青年期の中に区分し、これらの過程において青年が第一次個性化の時期であった早期幼児期の重要な要求と葛藤を本質的には極めて似た形で再体験し、その克服のための最後の試みを行なう点に着目したことにあ

る。

非精神分析的青年心理学は青年期における人格の再統合、自我の確立、本能衝動の高まり、不安と危機、混乱と奇妙さなどの現象面には気付いてきたが、これらを人格の構造的特質の法則的な変遷の中に位置づけて、その

* 邦訳には時に決定的な誤訳が散見されるのでできれば原著をも参照されることをすすめたい。

心理学的意味を明らかにする視点をもたなかった。人格の統合、自我の形成、本能衝動の変遷とそれへの自我の対処と防衛の様式、不安の現象学と力動的理解など青年心理学で扱われる中心的なテーマの多くは、いずれも本来、狭義の青年心理学の手には負えない、高度に人格心理学的かつ臨床心理学的なテーマである。

ここで問題となるのは、このようなテーマを解明する方法と技術である。Blos の方法は徹底的な症例研究である。つとに1941年に公刊された彼の最初の著書は、アメリカの中学校カリキュラムについてのコミッションに委託されて行なった青年研究の一環をなすものであり、生活適応上とりたてて目立つ問題をもたない4人の青年男女についての詳細な面接記録を主な資料として用い、10年後の著書で展開された彼の理論の原型、芽生えとも称すべき考察が述べられている。児童、青年の精神分析家として多数の臨床例を経験した彼は、臨床的観察事実を組織立てて理解しうる理論を自ら構築したが、この理論と現実の青年との関係を改めて示すべく、最近2人の臨床例についての詳細な症例研究書(Blos, 1970)を書いた。記述から察するに、彼はいわゆる自由連想や夢の分析に頼るというよりは、精神分析に基礎をおくかなり自由な対面状況での治療を目指した対話からの資料にもとづいて症例研究を行なっている。ここで考察されている2人の症例はいずれも、児童期から青年前期に及ぶ数年間の発達経過を追って研究されており、とくに、10才から14才の青年前期に焦点を合わせ、これまで多く研究されている青年中期、後期の適応障害は青年前期に既に発生していること、そしてこの時期を理解するためには、児童期(潜在期)に彼(もしくは彼女)がどのように自我を発達させたか、前青年期に特徴的な退行現象がどのような形で生じたかを適切に把握しておく必要があることが例証されている。

このように Blos の方法は統計的検討や実験統制的な仮説検証は全く採っていないが、極めて広範囲にわたる臨床経験と理論を活用しながら症例の人格形成過程を刻明にかつ鮮かに再構成していくやり方は大きな説得力をもっている。さらに特筆すべきは、しばしば精神分析的な人格論への批判として正常でない特殊例からの見解を普遍化しすぎるといふ意見が出るが、Blos は高校教師として、またガイダンス・ワーカーとしてあらゆるタイプの青年と長期にわたり現実場面で交渉をもつという経験も豊かにもっていたことである。要するに、理論家と実践家、精神分析者と高校教師といった容易に両立し難い志向を立派に統合し切っているところに、われわれは彼の学問の普遍性、深さと大きな発展可能性の根源をみる

ことができると思う。Erikson とちがいいたくななまでに正統精神分析の立場から出ようとしない Blos は青年の人格形成にとって文化や環境が本質的重要性をもつことを認めつつも、これらについての考察は控え目で慎重である。わが国の心理学者にとって、Blos よりは Erikson の方が受け入れ易いように観察されるが、Erikson の考え方も実は Blos が理論化した観察事実を前提にしたものであることを忘れてはなるまい。このことは社会学者にとってはそれ程重要ではなからうが、衝動や不安や自我形成を直接考察の対象とする青年心理学者は深く留意すべき点であろう。最近出版された Martin Gold と Elizabeth Douvan による「青年発達の研究と理論におけるリーディングス」(1969)の第一部・発達概念としての青年期——に収められた4つの論文の著者には、社会学者、文化人類学者1人ずつと並んで、狭義の精神分析学者1人および個人・社会・精神分析学者とも呼べるべき E. Erikson が含まれていることは故無しとしない。

b. E.H. Erikson の自我アイデンティティ理論 最近 E. H. Erikson の著書が、わが国の心理学者、社会学者により相次いで邦訳され、彼の提唱したアイデンティティという概念も漸くわれわれにとってなじみ深いものになりつつあるかに見える(もっとも彼の発達心理学理論そのものが一番詳しく述べられている、“Growth and crisis of the healthy personality” および “The problem of ego identity” の2つの論文(1959)が訳されていないのは残念であるが)。これらに示されている彼の見解は、David Rapaport が「精神分析的自我心理学の系譜」と題する序論を書いていることからわかる通り、本来、自我心理学の文脈において理解されるべきものであり、彼の理論のもつこの本質をわが国の青年心理学が今後どう受けとめていくかは1つの問題である。

Erikson の理論の母胎は、彼の主著(1950, 1963)が論及しているトピックスの範囲の広さからも明らかなように、児童との遊戯療法経験、同一児童の縦断的発達心理学研究、異なった文化間における児童期の経験と意味の比較研究、芸術家、宗教家、学者、政治家の自伝を人格形成という観点から分析した研究などに及んでおり、それだけに彼の理論の含蓄する深さと豊かさとをわれわれが自らのものにするには非常な困難があると想像される。

もう1つの問題は彼自身がその著書(1968)のまえがきで述べているようにアイデンティティという概念は説明によって定義することが本来不可能な性質をもっており、「種々の文脈のなかでその不可欠性を立証する以外

に、それを探究することができない」ために、この概念を把握することがむずかしいことに加えて、操作的な概念として研究に活用することもまたきわめて困難な点にある。良く知られているいくつかの発達段階に特有の心理的危機およびそれと対極に設定されている危機を克服した状態ともいえるような望ましく、健康な発達過程様相にしても、両者はいわば弁証法的に止揚されて発展していくのであって、ある個人をただ両極の間のどこかに位置づけることをもって彼の Identity を客観化したとはいえないのである。彼の概念を借用した多くの心理学的研究が概して皮層的な意味の少ない結果しかもたらさないように筆者に思えるのもこうした事情によるところが大きいと考えられる。しかしこの Erikson の直観に由来するところの大きい諸概念を操作的な方法で実証しようとする試みそのものが無意味だとは思えない。例えば James E. Marcia (1966) は大学生に半ば構造化された面接を行なって、各人を Identity 危機への対処の仕方により4種に分類した。Identity の達成群、モラトリウム群(職業的にもイデオロギー的にもコミットするものがないが生きる方向の決定を探索中の人々)、早期完了群(foreclosure: 危機を経験することなしに、あっさり目標がきまってしまう、コミットしている人々。しばしば親のいうことにそのままついていける人々であることが多い)拡散群(コミットへの動きがみられない人々)このように危機経験の有無とコミットメントの有無を組み合わせで分類した4群は、自己評価の安定度、被影響度と権威主義的態度に関して有意の差を示した。すなわち、一般に、Identity 達成群とこれについてモラトリウム群は、自己評価が変化を受けやすい情報を与えるという条件下でもその変化が少なく、逆に早期完了群と拡散群は自己評価が変化しやすいこと、また権威主義的態度は早期完了群においてのみ際立っていることが判明した。なお興味あることに、Identity のあり方と一般適応度や不安度との関係を調べたところ、Identity の地位(在り方)の望ましきの順位を仮に、達成、モラトリウム、早期完了、拡散の順とすると、この順位は不安の強さの順位とは対応しないとの結果を得た。不安はモラトリウム群でもっとも強く、早期完了群で最低であり、有意差はでなかったとはいえ、この結果はそれぞれの分類基準から考えて良く了解できる。Identity という概念は発達途上にある青年の人格の健康や潜在成長力を考えるには役立つが、いわゆる適応の概念とはかなり本質を異にするものであることが Marcia の研究により、ある意味では実証されたといえるかも知れない。

他の興味ある研究は N. V. Ciaccio (1971) による

Erikson の ego epigenesis のテストと題するもので、5才、8才、11才の3群の子どもたちに5枚の投映法的な絵画をみせて話をつくらせ、その話を客観的に分析して、彼らが、Erikson の仮定した発達諸段階毎に特徴的な危機をどの程度経験しているか、その危機の性質と程度が Erikson の仮定した通りであるかどうかをテストしている。この結果は Erikson の仮定を裏づけるもので、たとえば11才児では第4段階の「勤勉・対・劣等感」の葛藤を示す反応がもっとも多く、第2段階の自律性についての葛藤は有意に減少し、第5の Identity 危機の段階に動き始めていることが明らかにされている。

この種の研究が青年心理学の発展にとっても意義そのものは極めてささやかなものであろうが、あまりにも実証的資料を示していない Erikson 流の学説の述べ方を僅かでも補う役割は果たしているように思える。

c. その他の精神分析的青年心理学の業績 精神分析的心理学は歴史的にもその方法論からも、心理学の他の考え方や正統心理学の方法論と交流することがむずかしく、これが精神分析的知見を伝統的心理学が受容しない大きな障害となっていた。しかしここ20年位以前から事情は少しずつ変化してきた。

その1つは精神分析的知見や理論仮説を実験的に立証したり、応用する動きが出てきたことであり、いわゆるニュー・ルック心理学はその1つの反映である。青年心理学の分野では、精神分析のメッカといわれるメニンガー・クリニックに併設されている研究所で行なわれた、前青年期における人格構造形成の研究(R. W. Gardner and A. Moriarty 1968) が精神分析的自我心理学と George Klein の認知的統制の概念との2つを理論上の枠組みとして用いたユニークな試みといえる。

9才から13才までの男女それぞれ約30人ずつを対象とし、成人の統制群とも比較しながら数多くの測度を用いて行なわれた研究成果の1つは、既にこの時期において、防衛のおよび認知統制的な体制は、しばしば考えられているよりもはるかに十分かつ明確に発達していることが明らかにされた点である。前思春期ではまだ防衛体制は大まかでほとんど形を成していないといった考え方はこの研究結果によって否定された。

また認知的統制の質や量と発達に伴うそれらの変化のテンポなどに着目することにより、前思春期から成人に至る人格発達をいくつかのタイプにわけける可能性が示唆された。たとえばある人々は前青年期の初期から後期にかけての認知的統制の変化方法をその後も追いつけて一段と変化していくであろうし、別の人々は前青年期までに変化がとまってしまうかも知れない。これと逆に

前青年期に変化しない人々がそのあとの発達で大きく変化することも考えられる。

もう1つ重要な発見と考えられるのは、しばしば仮定されているように破瓜期およびこれに引続く時期において防衛体制が顕著に変化するとみるのは少なくとも正常な児童の多くにはあてはまらないということである。つまり、前青年期から成人にかけて変化するのは特定の防衛構造とそれが作用した所産であって、諸防衛のパターン化そのものはあまり変化しないと考える方が当を得ていると著者らは述べているのである。

青年心理学、発達心理学に1つの新しい分野を開いたこの研究方向の今後の発展を期待したい。

精神分析とアカデミック心理学との交流の他の方向は自我心理学が Piaget の業績を積極的に評価して自らの理論に統合し始めていることである。精神分析の立場に立ち、精神分裂病者の家族の研究で著名な精神医学者 Theodore Lidz が著した "The Person -His Development throughout the Life Cycle" (1968) という書物もその好例である。たとえば青年前期の心性についての記述では Piaget の形式的操作の時期にふれてその人格上の意味をも含めたかなり詳細にわたる論議が見出される。この書物はこのように精神分析の立場に立ちながらも包括的に青年心理の本質的特性についての適確で過不足のないこなれた解説を目指しており、理論的に鮮かに緻密に攻めていく Blos の取りあげ方とは対照的ながら、生涯の周期の中に青年期を位置づけてその力動と構造を理解するには最適の労作である。

縦断的研究

a. Berkeley と Oakland の成長研究

わが国の青年心理学研究者が今後少なくとも当分の間は自ら行ない得ないと考えられるのが、個々人の精神発達の息長く縦断的な追跡であろう。先に紹介したメニンジャー研究所の研究も乳児からの縦断研究の対象者を多く含んでいたが、Berkeley のカリフォルニア大学人間発達研究所の40年以上におよぶ仕事も著名である。最近公刊された本研究所員の主要研究業績集 (M. C. Jones, N. Bayley, J. Macfarlane, M. P. Honzik, 1971) は、青年心理学研究者にとっても貴重な示唆を与えてくれるものである。とくに筆者にとって興味深かったのは、30才時の精神健康をもっともよく予測できる行動資料は、11才～13才の前青年期にえられたものであり、それ以前もしくは以後の時期の資料はこの目的にはあまり役立たないという結果であった。(N. Livson & H. Peskin, 1967, 1971) 共同研究者の1人、H. Peskinはこの資料

を別の方法で分析したところ、成人の精神健康を予測できた項目の得点値が前青年期と青年期とは有意に逆転していることを見出した。(H. Peskin, 1972) この結果からみる限りでは、青年期の不安定性や暗さなどの否定的傾向も前青年期までに安定と強さを備えた一定の人格を形成してあれば、とくに心配するに及ばないといえるかも知れない。しかしこの種の研究の大きな弱点は、精神健康といった複雑で定義の困難な対象に対して用いる測度や問題接近の態度があまりにも単純、皮層にすぎない点ではなからうか。

このプロジェクトの長年にわたる推進者であった J. W. Macfarlane は同じ書物の中で、研究者の予測が結果的にはむしろ否定される例がきわめて多かったことを卒直にみとめ、そうならしめた要因を列挙しているが、この書物の最大の貢献はもしかすると、人間の驚くべき柔軟な適応力と強烈な自己実現への傾向の存在を読者に感じさせ、一生の発達過程のうちに占める青年期の意味を普遍的法則的な形で把握することには非常な限界があることを教えてくれる点にあるのかも知れない。

b. Rachel Dunaway Cox: Youth into maturity
カリフォルニア大学の縦断的研究が継的に蓄積されたぼう大な資料をもちながら、青年期の特徴について必ずしも clear-cut な知見を生み出さなかったかに見えるのは、人格形成過程についての理論的枠組みの不十分さおよびこれと関連して分析視点が恣意的、散発的で拡散していることが大きな原因と考えられるが、もう1つアカデミックな心理学の資料分析法に専ら頼っているために折角の面接資料や投映法の所見を活用し切れないでいる嫌いもうかがえる。Cox (1970) の研究はハーバード大学の学生だった研究対象者たちを10年後に再び調査し、大学卒業後10年間の人生経験が人格にどのような影響を及ぼすかを解明した異色のものであるが、視点を精神的健康の変遷と職業、結婚など7つの生活領域における主要な経験の記述と評価の2つに絞り、精神的健康については社会的な生活における心理的ストレスとの関連性という角度から分析しているので、成人性との関連においてみられた青年心理学という意味でも様々の示唆に富んでいる。現代アメリカ社会の知的教育的エリートがどのような形で精神的に成熟していくか、実人生の最初の10年間に経験する種々のストレスにどう対処していくか、ストレスを克服できるかできないかを規定する条件は何か、等の多くの問いに対する答をわれわれは見出すことができる。また成人生活において当面する諸課題へのかわり方を多面的に分析し客観化するために考察された多くの尺度は青年心理学研究にとっても参考になる

う。

c. Youth in Transition——ミシガン大学社会的リサーチのための研究所による男子高校生の社会心理学的縦断研究—— この研究は元来、アメリカ合衆国文部省の後援の下に、高校中退者を非中退者と比べた場合、どのような特異な社会環境条件下にあるかを解明することを目指して計画されたものである。しかしそのためには多くの他の社会環境条件の影響をも広く明らかにする必要がある、結局大規模なスケールの研究として、1965年に開始されたものである。計画の青写真は1968年に243頁の小冊子として出版され、ついで1970年には「高校1年生男子におよぼす家庭背景と知能の影響」と題する最初の研究報告書が公開された。調査を専門とする研究所が、その高度の技術、完備したスタッフと設備、優れた社会心理学者、青年心理学者の知見を十分に活用して行なった研究成果は青年心理学にとっても貴重なものであるが、ここでは研究の存在を紹介するにとどめる。

青年期の混乱と危機

青年期が不安と動揺に満ちた危機的な時期であることは古く Stanley Hall の “Sturm und Drang” という表現に、また近年では Erikson の Identity Crisis という概念に象徴的に示されている。ところが現実には、青年達がどの程度、どのような形でこの混乱 (turmoil) を経験するか、混乱を規定する社会的条件、個性的条件は何であるかといった設問は比較的最近まで行なわれなかった。アメリカにおいて、Erikson の Identity Crisis 概念が青年心理学の世界のみならず、青年達自身の間にまで広く知られるようになってきた1960年代のはじめごろから、この考え方に疑問を投げかける研究成果がいくつかあらわれ出した。その代表的なものは E. Douvan & J. Adelson (1966) による全米から適切に抽出された多数の青年男女を面接しての調査結果および D. Offer (1969) による大都市郊外小都市の2つの高校の男子生徒の中から modal adolescents として選ばれたものを3年間にわたって追跡調査した結果である。

他方、危機説を支援する研究証拠も少なくない。前述のカリフォルニア大学の縦断研究においても、相当に多数の被験者が40才までの生活のうちで青年時代をもっとも混乱著しく、生への意欲が低下した時期と報告していることが明らかにされた。

Ellis D. Evans & Thomas H. Potten (1970) は Identity Crisis についての理論、考察、研究を展望しているが、危機仮説の評価、位置づけに関しては読者にゆだねてしまっている。

筆者の考えでは、危機を促進したり、克服したり、回避もしくは抑制したりする、個人的、社会的条件を明らかにしながら、こうした条件との関係において危機現象をきめ細かく観察し、必要ならば危機の下位類型を分類していくことが望ましい。また青年の心の内面において秘やかに演じられしばしば本人にすらはっきりとは気付かれることのないような自我確立の戦いのドラマと比較的表面的な一問一答に近い面接調査結果にあらわれた青年の心理とを同一次元で論ずることが、危機学説をめぐる混乱の一因となっていることにも留意せねばならない。

青年期の病的混乱をより正常な青年心理と関連づけながら考察した研究書や概観書があらわれてきたのも最近の傾向である。I. Weiner (1970) の概論書、J. Jacobs (1971) の青年の自殺の考察、J. Masterson (1969) の青年期の混乱 (turmoil) の精神医学的考察の3冊が筆者が手にし得たものである。Jacobs の研究は自殺企図青年と対照群との心理・社会的条件の差を克明に分析し、多くの興味ある知見を得ている。青年の精神の強さともろさを一般的に考察する際にも大いに活用しうる研究である。Masterson の研究はニューヨーク市の高校生を対象にしているという制限はあるが、それだけに巨大都市に住む青年のいかに多くが不安や抑うつ症状に苦しんでいるか、またそれにもかかわらず、深刻な病的混乱にまで陥る青年の殆どは決して青年期の混乱だけでそうなるのではなく、児童期からの病態が青年期に強められたものと考えべきことなどが明らかにされている。

結 語

青年期人格形成の問題を、統合と統合危機、正常と異常の観点から主として精神分析的自我心理学と縦断的発達研究の成果を中心に展望した。論点の整理、展開よりは主要な業績の紹介にとどまったが、ここに示したアメリカ青年心理学の最近の知見を日本の現代青年の人格形成の心理学的理解に活用してゆくことが今後われわれの大きな課題となるであろう。

文 献

- Ausubel, D. P. 1958. *Theory and Problems of Adolescent Development*. New York: Grune & Stratton.
- Blos, P. 1941 *The Adolescent Personality*. Appleton-Century-Croft, S, Inc., New York.
- Blos, P. 1962 *On Adolescence: A Psychoanalytic Interpretation*. The Free Press of Glencoe, New York.
- Blos, P. 1965 *The Initial Stage of Male Adolescence. The Psychoanalytic Study of the Child*. International Universities Press, New York, Vol. XX.
- Blos, P. 1967 *The Second Individuation Process of Adolescence. The Psychoanalytic Study of the Child*. International Universities Press, New York, Vol. XXII.
- Blos, P. 1968 *Character Formation in Adolescence. The Psychoanalytic Study of the Child*. International Universities Press, New York, Vol. XXIII.
- Blos, P. 1969 *Youth Unrest: A Symposium. The Am. Journal of Psychiatry*, Vol 125: No.9.
- Blos, P. 1970 *The Young Adolescent: Clinical Studies*. The Free Press (Macmillan Co.) New York.
- Blos, P. 1971 *The Child Analyst Looks at the Young Adolescent*. Daedalus, *Journal of the American Academy of Arts and Sciences*.
- Ciacchio, N.V. 1971, A test of Eriksom's theory of ego epigenesis. *Developmental psychology*, 4, 306—311
- Cox, R. D. 1970 *Youth into maturity*, New York: Mental Health Material Center.
- Douvan, E. and Adelson, J. 1966 *The Adolescent Experience*. New York: John Wiley.
- Erikson, E. H. 1959 *Identity and the life cycle: selected papers. Psychological Issues Monograph Series*, I: No. I. New York: International Universities Press.
- Erikson, E. H. 1963 *Childhood and Society*(2d Ed.) New York: W. W. Norton.
- Erikson, E. H. 1968 *Identity: Youth and Crisis*. New York: W. W. Norton.
- Evans, E. & Potter, T. H. 1970 *Identity Crisis: A brief perspective*. In Evans, E. (Ed.) *Adolescents- Readings in behavior and development*: Hinsdale, Illinois: The Dryden Press.
- Gardner, R. W. & Moriarty, A. 1968 *Personality Development at Preadolescence —Explorations of Structure Formation*. Seattle and London: University of Washington Press.
- Gold, M. & Douvan, E. Ed. 1969 *Adolescent Development —Readings in Research and Theory*. Boston: Allyn and Bacon.

- Jacobs, J. 1971 *Adolescent Suicide*. New York : Wiley
- Jones, M. C., Bayley, N., Macfarlane, J. W. and Honzik, M. P. (Eds.) 1971 *The Course of Human Development*. Waltham, Mass. : Xerox College Pub.
- Lidz, T. 1968 *The Person—His Development throughout the Life Cycle*. New York : Basic Books.
- Livson, N. & Peskin, H. 1967 Prediction of adult psychological health in a longitudinal study. *J. Abn. Psychol.* 72, 509—518
- Marcia, James E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personal and Social Psychology*, 3, 551—558
- Masterson, J. F., Jr. 1967 *The Psychiatric Dilemma of Adolescence*. Boston : Little, Brown.
- 西平直喜 1964 青年の心理学的特性の形成機構—方法論的視点から— *心理学評論* 8, 102—114
- Offer, D. 1969 *The Psychological World of the Teen-ager—A Study of Normal Adolescent Boys*. New York : Basic Books.
- Peskin, H. 1972 Multiple prediction of adult psychological health from preadolescent and adolescent behavior. *J. Consult. & Clin. Psychol.* 38, 155—160
- Survey Research Center (Bachman, J. G. et al) 1969 *Youth in Transition. Volume I. Blueprint for a Longitudinal Study of Adolescent Boys*. Ann Arbor, Michigan : Institute for Social Research.
- Survey Research Center (Bachman, J. G.) 1970 *Youth in Transition Volume 2. The Impact of Family Background and Intelligence on Tenth-Grade Boys*. Ann Arbor : Inst. Soc. Res.
- Weiner, I. 1970 *Psychological Disturbance in Adolescence*. New York: Wiley.

(1972年10月31日 原稿受付)